昭和39年8月25日　発行

脳波の誘い

著作者　佐野　洋
発行者　矢貴東司
印刷者　小泉輝章

発行所　株式会社　桃源社
東京都中央区日本橋蠣殻町1—12
電話（671）4001～2番
振替東京64351番

〒270

《検印廃止》

落丁・乱丁の節はお取替え致します　1964 ©

脳波の誘い

ポピュラー・ブックス

脳波の誘い

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongb

〔お断り〕

作中で使われている『テレパシー』（精神感応）或いは『脳波』という言葉は、正しい使われ方をしていません。作中人物たちは、これらの言葉を少し誤解して、拡大解釈をしているようです。

（作者）

第一部

——彼が自殺をすれば必然的に……という考えが心の片隅に宿った。

第Ⅰ章

（昭和三十×年四月二十三日　午前）

1

『週刊東洋』と金文字で抜かれたガラスのドアを押しあけ、黒背広、黒ズボン、黒ソフト姿の水崎啓次が編集部に戻って来た。これは、彼の自慢の服装だった。男でも、女でも、黒のものを着こなせるようにならなければ、一人前とは言えないという主張を、彼は持っていた。そして、自分では、黒を着こなしているつもりだった。たしかに、学生時代サッカーをやったという、体格のよい水崎には、この黒は似合わないでもなかった。彼がときたま、ツイードの上衣などを着ると、かえって異様に感じられるほどであった。

ただ、『週刊東洋』編集部唯一の婦人記者、高原圭子に言わせると、黒ソフトだけは、不似合いだし、気障っぽく見えるそうだが、水崎はその意見を受入れなかった。

「圭ちゃんに、もてようとは思わないからね」

水崎はこう言って、相変らず、その服装を続けていた——。
その不評判の黒ソフトを、大事そうに壁の帽子掛けに掛け、水崎は、まっすぐ、編集長のデスクに近寄った。
編集長の阿部は、新聞を読んでいたが、いぶかるような眼を上げて、水崎を迎えた。
「だめですよ、全然、これですから……」
水崎は右手を耳の脇でくるくると廻した。
「何？　あ、そうかそうか、例のあれな。君会って来たのか？」
阿部編集長は、水崎が何の取材に行ったかを、やっと思い出したらしい。
「会って来たのかはないでしょう。編集長の命令で行ったんだもの。おかげで、二時間というもの、気違いにつきあわされて、ひどい目に遇いましたよ」
そう言いながらも、水崎にはその取材が、それほど不愉快ではなかったようだ。ポケットからパイプを出して、ライターで火をつけ、思い出したように、心持ち口をゆがめて笑った。
「いや、忘れていたわけではないがね……」
阿部は一応弁解してから、言葉を続けた。
「で、それ全然物にならないかね？　何かファンタジー風な読物にでもできたらと思ったのだが……」
「だめですな。第一、あの林田悟平とかいう爺さん、二年前、精神病院のお世話になったことが

あるんですよ。家族はかみさんと、長男夫婦が同居していますが、その話によると、ほかのことではほとんどおかしい点はないんだそうですがね、その『テレパシー』に関してだけは、絶対に、自分にその能力があると信じて疑わないんですね。しかも、それを理論づけてしゃべるんだから、始末に悪い。ぼくがいいかげんにして引き上げようとすると、手を引っぱるようにして、引きとめるのですよ。そして、ときどき、こっちのメモをのぞき込んで、本当に話を聞いているかどうかを、たしかめようとするし……。この間、やくざを取材したときより、手を焼きましたよ」

水崎は、右手にパイプを持ち、左手は黒ズボンのポケットに突込んで、話していた。

十五人いる『週刊東洋』の編集部では、水崎は最も有能な記者の一人に数えられていた。企画性もあったし、筆も立った。そして何よりも理解力、判断力が優れていた。原子力や、宇宙ロケットの話を学者に聞きに行っても、一時間ぐらいの取材で、結構、通俗的な解説記事を、それほどの誤りなくまとめることができた。だから、何か難しい専門的な取材には、いつも水崎が狩り出された。

そのように、『週刊東洋』にとっては、たしかに水崎は必要な記者であったが、その自信が彼に、はたからは尊大と見えるポーズをとらせることもあった。たとえ編集長と話すときでも、相手が編集長だということを、ことさらには意識しないようだった。平気でパイプをくゆらしたし、ときにはそのデスクにもたれかかることもあった。出版社の内部、ことに週刊誌の編集部と

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongb

もなれば、銀行や一般の会社のような上下の規律というものはなかったが、それでも水崎の態度は、他の者には真似ができないほど、自由であった。

「しかし、そのテレパシーというのは、理論的には可能なものだそうじゃないか」

阿部は、水崎が気違いと極めつけ、記事にはできないと言ったことが、多少不満らしかった。

「そうですか？　それ、誰が言ったことなんです？」

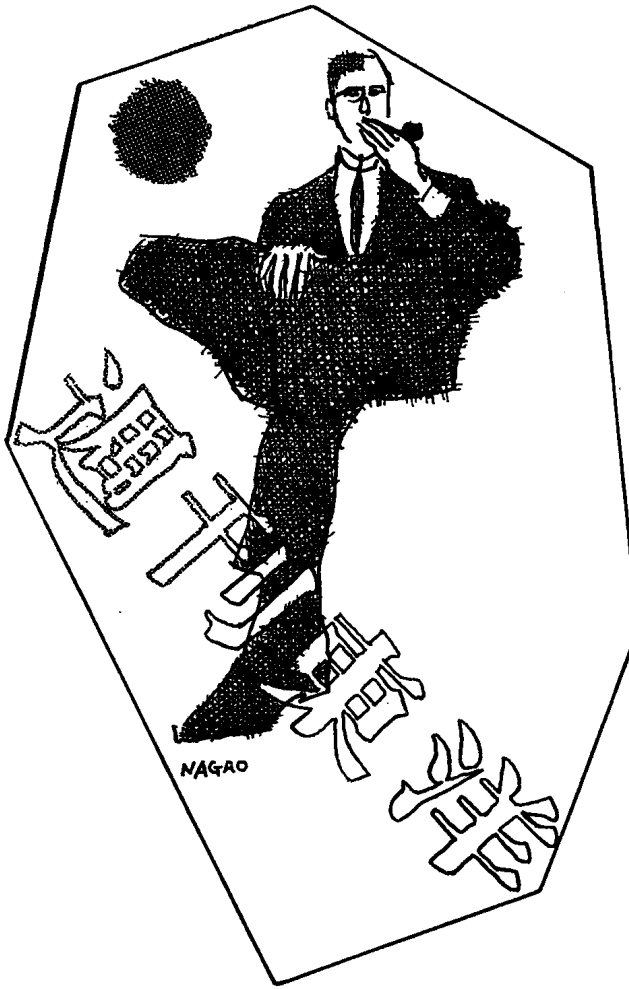
「いや、あの話を紹介した出版部長なんだがね。ええと……」

阿部はこう言って、ポケットから手帳を出し、その間に挟んであった新聞の切抜きを出してみせた。

「これは、出版部長が例の話をするとき渡してくれた中央日報の切抜きなんだがね。これによると、一九五七年の米国数学会統計部会では『人間に透視、思念伝達、予知、念力の四つの超心理的な能力がある』という統計調査に、数学的な誤りがないことが確認されたそうじゃないか？」

「いや、ちょっと待って下さい。そういう記事をそのまま信じるのは、極めて危険ですよ。どうせ外電の翻訳なんでしょうが、向うの記者が、正確な取材をしたかどうかの保証がない。それから、テレタイプを打つとき、not を打ち忘れたという可能性もあるし、さらに、その新聞社の外報部員が誤訳したかも知れないでしょう。第一、大脳生理学者か神経科医の学界で発表されたものでなく、数学の統計部会ではねえ……」

こういう話になると、水崎は必ず雄弁になった。


NAGAO

「しかし君……」
編集長はなおも未練を持っていた。
「この記事を、ゴチックで囲んで、一つの裏付けを示してから、テレパシーができるというその老人との会見記にすれば、とにかく読物にはなるだろう。最近の週刊誌が、どうも現実的な話ばかり書いているから、こんな話も、変っていていいと思うがね」
「もちろん、無理にやれとおっしゃるなら、やりますよ。しかし、物笑いになっても、知りませんよ。あの爺さんのは、テレパシーなんて高級なものではないんですから……、一種の妄想じゃないですかねえ。いいですか、一応、メモだけはとってありますから、説明しましょうか？」
水崎はこう言って、上衣の内ポケットからメモ帳を取り出した。

2

「まず、環境から言いますとね。目黒の洋服屋です。この洋服屋は息子がやっているのですがね、息子の年齢は三十一歳です。この息子の嫁さんというのは、ぽちゃぽちゃとした、ちょっとかわいい人です。その親父が問題の『精神感応研究家』で、テレパシーの能力があると自称している林田悟平氏です。六十歳ですがね。まあ外見は、すこぶる風格があります。町内の世話でもやいていれば、結構いい爺さんでしょうね。ところでですね。彼は三年ほど前から、何か他人の声が、どこからともなく、耳に聞えてくるように感じ始めたんだそうです。そして、しまいに

は、その声に命令されるようになり、行動が支配されるように思われて来た。医者に見てもらったら、精神分裂症と診断され、半年ばかり入院したんです。その間、電撃療法か何かを受けた結果、全快とまではいかないけれど、快方に向ったと言うので、一年前に退院したんです」

水崎の説明を、阿部はときどき、うなずきながら聞いていた。そのほかにも、手のあいている編集部員数人が、水崎の話に耳を傾けていた。恐らく、先刻から、編集長と水崎の討論を聞いて、その成行きに興味を持ったのであろう。仕事を放り出し、二人のそばに近寄って来た者さえあった。

「退院してからは、そういう幻聴はなくなったらしいのですがね、前に一度経験した幻聴を病気のせいだと考えたくないのでしょうね。難しい本を、無理して読んで、幻聴の理論づけをし始めたんですよ。誰に吹き込まれたのか知れないが、彼はテレパシーつまり、精神感応という言葉を知った。そして、〃これだ〃と思いこんだわけです。しかし、このテレパシーというやつを、爺さんは〃以心伝心〃という意味に解したんですね。〃以心伝心〃ということは、日常、誰でも経験することでさあ。爺さんはかつての幻聴を、この以心伝心が、最も明確に現われたものと信じてしまいました。例えば爺さんが煙草を喫いたいなと、目で煙管を探しているとき、そばにいた婆さんがそれを取ってくれたとしますね。すると、爺さんは自分の意志が婆さんの精神に命令を与え、そういう行為をさせたと考えるわけです。ただ婆さんは精神感応の能力が非常に薄いから、心の中で声を聞くほどにはなっていないが、少し練習をして、研究を積めば、それが可能

だ、まあこんなぐあいに考え始めたんですよ。それ以来、彼は涙ぐましい努力をしたらしいです。『以心伝心』ということを調べるために禅の本を読むし、『霊』を知るために、プラトンからルカ伝にまで眼を通したんです。実際、どれだけ理解したのか分りませんが、その結果、人間には念力があるという結論に達したんだそうです」

水崎は、自分の周囲に人が集って来たのを意識してか、故意にゆっくりとしゃべっていた。しかし、彼自身がその話の内容を、全然信じていないのは、話しながら、絶えず口もとに皮肉な微笑を浮べていることからも、分った。聞いている方も、そのような気違いの爺さんを、単に話題にしようというほどの、軽い気持だったかも知れない。とくに質問をしようというものもなく、聞きながしているだけであった。

「そして、この念力という言葉の説明がまた傑作なんです。彼が何かを考えると、脳波となって、誰かの脳に達する。そこで、その脳波を受けた人物は、彼の思い通りに動く。これは学問的な考え方だなんて、爺さん、威張っていましたよ」

「脳波？　たしか、そんな言葉を聞いたことあるな。実際に、そういうものがあるのかね？」

編集長が、より強い興味を見せて聞いた。

「さあ、詳しいことは知りませんが、そう言うことばがあることは事実ですね。たしか、脳から出る非常に弱い周期的な電流があって、それを記録すると、波形になるので、脳波と呼ぶんじゃないですか？　だから、林田悟平氏の言うように、思ったことが、脳波となって、他人に達する

という言い方をすると、ちょっと違うかも知れませんが、要するに気違いの言うことですから……」

「ふん。じゃあ、まあ、それはそれとして、何だかその精神感応を実際にやったことがあると言う話じゃないか？　それを聞かしてくれよ。理論的にはどうか知らないが、もしその実際にやったというのが本当なら、一応、記事にはできるだろう。学者の意見なり、批判なりをつければ、それほどおかしくもない……」

編集長は、どうしても、この『テレパシー』を記事にさせたいらしかった。

「しかし、編集長、どうしてこれをそんなに載せたいんですか？　ほかにネタがないわけじゃないでしょうに……」

「うん。実はきのうの部長会のとき、専務から、何かこう奇妙きてれつな話はないかと言われてね。近ごろは推理小説ブームとか何とか評判があるが、非常に理屈ぽくなっている。そう言う理屈ではなく、現代の科学では分らない、文字通りの神秘現象を取り上げてみないか。まあ、そういう話があったのさ。それで昨日から頭を悩ましているところへ、今朝早くその林田悟平なる人物から、売り込みの電話があったもので、これ幸いと飛びついたわけだよ」

「ははあ、なるほど……」

水崎は首を二、三回こまかく振った。

「しかし、どうもねえ……、彼の言っている精神感応の経験というやつは、ちゃちなものです

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongb